

塚田先生とのこと

昭和三十年そこそこ、私がまだ広島大学の学部生だったのではないかと思うのですが、広島大学国語国文学会の使い走りをしていたころ、学会のポスター類を書いていただいたのが、お若いころの塚田康信先生でした。当時塚田先生が何をしておられて、何故先生にポスター類を書いていただくことになったのか、その細部の経緯については下っ端の私には判らないのですが、ともあれ塚田先生は昭和二十七年に広島文理科大学を卒業されて、広島県立賀茂高等学校の先生をしておられたはずなので、後輩たちの懇請を受けて西条から千田町までわざわざお出で下さったのでしよう。立看板や研究発表の題目を私どもの用意した紙に墨汁でスラスラと書いて下さるのですが、即座に出来る肉太でやわらかい感じの書体は、温顔でいくらか小太りなお身体やキビキビして丸い声音そのままにあたたかいお人柄をそっくり反映していると思えました。数年このことが続いたのでした。

昭和三十七年、可部女子短期大学が創設されました。当初学生を集めることが大変むつかしいことでした、広島地区で短期大学に進みたくてもその希望を達せられない人たちは当時も調査上数多かったです、開学早々のところにはなかなか学生が集まらないものなのです。そこで新しく発足した短期大学を知っていただくために、各地の高等学校を学生募集のために訪問しましたが、私の場合は『尚志会名簿』を手引きにして広島大学の先輩たちを頼って巡回したのでした。賀茂高校では当然塚田先生を尋ねたのですが、例の温顔でなつかしそうに迎えて下さるのでした。以前は軍人さんでしたから、当時のこととて将校服を着ておられたこともあるのが今も印象にあります。通常は通り一遍の応対で終るのですが、それぞれ勤務でおいそがしいのでそれは当然のことなのですが、塚田先生は心をもつて接して下さったと感じたことでした。そこで私はほっと一息ついて、次の高校に向ったのです。即効性はないが永続

性のある対応をしていただいたのだと思います。

永い歳月が過ぎました、半袖シャツでビールを飲んだ記憶がありますから、昭和五十八年の夏だったでしょうか、広島駅ビル五階のレストランで塚田先生に再会しました。塚田先生は当時、福岡教育大学教授であられたのですが、広島大学の集中講義のためにお出かけになるところを、お願いしてお目にかかったのです。二十年近い歳月は、私自身を半白の髪をいただくに至らしめていましたが、先生は昔のままに髪黒く若々しい温顔であるのに驚いたことでした。先生は髪を染めていらっしゃるのですかと、つい失礼なことを聞いた記憶があります。ここで始めて広島文教女子大学文学部国文学科に書道専修を創設するために御協力いただくようお願いしたのでした。

「書は人なり」という言葉を信じ、書道が人間教育に資することを信じて疑わない武田ミキ学長は、文学部創設当初から書道専修を併設したいという素志を有しておられました。しかし人が得られません、早く何とかならないのかと叱られながら、私には塚田先生の姿しか浮かんでこないのです。本学の書道専修創設は、塚田先生を措いて他人なしという思いが強くなるばかり、学長に本当にいい人がいらっしゃるから今しばらく待つて下さいと言いつつ、いました。と申しながら、先生にお願いしたのは福岡教育大学御停年なられる年の夏ということで、何とも悠長なことでありましたが、何となく意が通じていると思ひ込んでいたのは、先生のあたたかい心を肌身感じていたからでしょう。先生は百年の知己のごとくに、その場で申し出を快諾して下さいました。後で聞くと、他の大学からもあれこれお誘いがあったようですが、本学の書道専修創設のために決意して下さいました。そして昭和六十年二月九日付をもって、本学の書道専修が文部省の認可を得られたのです。

金子金治郎先生は、塚田先生にとって同郷（信州）の先輩であり、広島高師の恩師であり、人間的にも大変尊敬しておられる方です。私も新制大学の大学院に学んだ者で、金子先生に私淑しているグループが中心になって金子先生を囲む会を開くことがあるのですが、塚田先生はどこかで聞きつけられて必ず参加なさるのです。そして会の流れで二宮町（二宮尊徳の出身地で尾崎一雄の生家の近くです）の丘の上にある金子先生宅にお邪魔するのが恒例にな

っているのですけれど、ある時塚田先生が金子邸の新築祝いとして「芙蓉山房」という扁額を贈っておられるのを知りました。その書が素晴らしいのです、書道における評語は知りませんが、瑞瑞しく豊麗にして雄勁、お座敷の長押に端正にピタリとはまるのです。うらやましいと思いましたが、先生の書が欲しいなあと思いましたが、私の身分では、望むべくもありません。数年我慢していましたが、学内の宴会の酔余の戯語めかして鈴張の老朽化した陋屋の玄関を飾る扁額が欲しいと言ってしまった、笑っておられました。また数年経ちました、夏休暇明けでしたか、ある日半切の宣紙に大きくたっぷり「鈴張書窓」と書いて渡して下さいました。こうした字は書かれないのが先生なのです、極めて遒勁、線太し（自評）の書は、鈴張の陋屋を光彩陸離たらしめるのです。今や家宝であります。

その塚田康信先生が、平成三年、古稀の寿を迎えられました。本当におめでたいことではありますが、私どもとしてはその寿を祝すべく「文教国文学」でこの特集を編むことといたしました。先生の学徳を慕って、多くの方々の御投稿をいただくことができました。ありがたいことです。深く感謝いたします。

塚田康信先生の今後の一層の御健勝をお祈りいたします。

平成四年三月吉日

横山邦治